昭和のアルバム

死と隣り合わせ

入隊、出征、学徒動員…。もう会えないかもしれない、と思いながらの撮影はどんな気持ちだったのでしょうか。今月は戦時中の写真をお届けします。

砲弾が飛び交う戦地では、兵士が懐に入れた家族の写真に触れて気持ちを支えたという話をよく耳にします。しかし、銃口を向ける敵兵にも家族や友人がいます。人の絆を確かめ、思いながら戦場に立つ兵士たちのことを思うと、やるせない気持ちが込み上げます。（霍見真一郎）

◇次回は８月26日に掲載します。

父も、叔父も亡くなって

■昭和12年6月、佐用郡佐用町

提供　佐用町、諏訪由美子さん(87)＝当時0歳（前列中央）

「右端の学生服姿の叔父が海軍に志願入隊し、広島の呉に向かうことになり、自宅の庭で写した1枚です。この叔父も、前列右の叔父も戦死しました。後列左から2人目に写る父は教師でした。戦争末期の昭和20年に出征、終戦を迎えたものの帰国することなく、香港の病院で亡くなりました。写真に写っている中で、今も生きているのは私だけ。寂しいです」

姉に送った家族写真

■昭和19年5月、多可郡黒田庄村（現・西脇市）

提供　西脇市、藤原洋一さん(86)＝当時6歳（前列右から3人目）

「学徒動員で飛行機を作る工場で働いていた姉から、家族写真を送ってほしいと連絡があり、写真屋さんを呼んで自宅前で写しました。姉は終戦後、布団などを背負い、かなりやせて帰ってきました。また、学校に進駐軍が来て講堂に並べていた剣道の竹刀や防具、なぎなたを集め、焼くのを見た覚えがあります」

出征する父を囲んで

■昭和18年ごろ、氷上郡生郷（いくさと）村（現・丹波市）

提供　神戸市中央区、青木恭子さん(90)＝当時９歳ごろ（最前列左端）

「父（２列目中央）が出征するときに親族などで写しました。戦争に行くといっても当時の私はあまりよく分かりませんでしたが、父が死んでしまうかもしれないと思うと怖かったのを覚えています。父は高射砲隊に配属され、山口県や広島県で従軍しました。原爆にも遭ったそうですが、無事に帰ってきて86歳まで生きました」

授業前に「ピカッ」と

■昭和19年8月、姫路市

提供　姫路市、山室國康さん(97)＝当時17歳

「旧制姫路中学（現・姫路西高校）を出た後、海軍兵学校に入り、夏季休暇中に写真館で撮りました。広島の江田島などで学びましたが、原爆が落ちた際は授業が始まる少し前にピカッと光って、大きなドーンという音を聞き、きのこ雲を見ました。爆撃も受けていたので、戦争末期には、そろそろ万歳（降伏）だなという気持ちになっていました」

満州で騎兵隊の父と

■昭和18年ごろ、満州（現・中国東北部）

提供　高砂市、北野容子さん(83)＝当時3歳ごろ

「騎兵隊だった父と写した1枚です。私は満州で生まれ、昭和19年の夏ごろ、一家で日本に引き揚げました。母が2人の弟を前と後ろに抱え、私の手を引いて帰国しました。戦後、中国残留孤児を紹介するテレビ番組を見ていた母が『連れて帰ることができて良かった』と、しみじみ話していたのが印象に残っています」

戦前戦後の古い写真も歓迎

「昭和のアルバム」は毎月第４月曜日に掲載します。戦前戦後の古い写真はもちろん、昭和30～60年代のカラー写真も歓迎します。

応募の条件は、①昭和期に撮り、時代の雰囲気が伝わる②投稿者が写っている③有名人と一緒の場合は、本人か遺族の了解を得る④できれば兵庫県内で撮影―とします。

撮影時期、場所、投稿者の撮影当時の年齢、メッセージを添えて、郵便か電子メールでお送りください。郵送の場合、写真は複写をした上でお返しします。２週間ほどかかりますので、ご了承ください。採用の方には図書カードを進呈します。

住所、名前、年齢（生年月日）、そして必ず電話番号を明記し、〒650―8571（住所不要）神戸新聞・編集委員会「昭和のアルバム係」へ。メールshowa@kobe-np.co.jp

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。